

宝^{たから}物^{もの}新^{しん}聞^{ぶん}

t a k a r a m o n o n e w s



宝物新聞

vol.11



ふくしま復興のために活動するひと②

『カーちゃんのカ・プロジェクト協議会』

会長 渡邊 とみ子 さん

2012年11月発行

タカラモノニュースは、お客様の「楽しい、ウレシイ」に役立つ情報提供を目指して、年4回発行しております。ご意見ご要望など、なんでもお気軽にお寄せください。



かーちゃんにつられて、
みんな笑った。





かーちゃん の力で 地域に元気を！



『かーちゃん』で響きがいいよね〜！

あははおほと楽しそうに笑う渡邊とみ子さん。
原発災害で避難しているかーちゃんたちの

「知恵」や「技術」や「元気」を束ね、地域復興に注ぐ
「かーちゃんの力・プロジェクト協議会」の会長だ。



写真：渡邊とみ子さん

かーちゃんの「わ！」

震災後に結成された「かーちゃんのカ・プロジェクト」。しかし、飯館村・浪江町・津島・葛尾村・田村市都路町・川内村のかーちゃんたちは、以前から様々な活動を通じて交流を結んでいた。

みんなそれぞれ、自分たちの住む大地を愛し、コソコソ人生をかけ、文字どおり「所懸命」やっていた。しかし、原発災害で手足とも言える田畑をもがれ、長引く避難生活のなか、かーちゃんたちの精神状態はギリギリまで追い詰められていた。みんな同じ気持ちでいるだろうな。とみさんが心配していた矢先、福島大学の先生からプロジェクトの話があった。二つ返事で引き受け、平成二十三年十月十九日プロジェクトが始動した。

なみだのあとに咲く笑顔

全体会で自己紹介をしているときのことだった。スタッフのノリちゃんが突然号泣したという。とみさんと一緒に商品ラベルのアイデアを練ったり、原価計算をしたり、次はどんな商品をつくろうかと楽しく悩んだ飯館村の日々が、みるみる溢れ出てきた。一心同体でやってきた土地から号令ひとつで引きはがされたつらさ、悔しさ、悲しさが堰を切り、かーちゃんみんなで泣いて、泣いた。

安心のかーちゃんマーク

現在は、弁当販売を主に活動している。本拠地のあぶくま茶屋のほか大学生協や役場での販売、会議や視察などのスポット注文にも対応する。「ウチの弁当はほとんど残さないで食べてくれ

転機が訪れたのは平成十七年。突如、イータテベイクじやがいも研究会の『会長』として、とみさんに白羽の矢が立った。芋掘り体験のイベントをお手伝いできれば…という軽い気持ちで入会したが、ところがどっこい一回目の設立総会に所用で十分遅れて行ったところ、会長を頼まれてしまったという。農業に関してはまったくの門外漢だからと断ったものの、座が埋まらないと終わらない。…つい、引き受けてしまった。「じゃがいも作ったことないのになんで会長なんだ!?」ってお父さんにすごく怒られたのよ」と、とみさんは笑う。



しかも植物防疫補助員という役も降ってきて、それからは本に顔を埋め畑に足を運びじゃがいもまっしぐらの日々を送った。「大変なことを引き受けちゃうのは…性格だね。そんなこんなで今も、飯館村オリジナル品種のじゃがいも『イータテベイク』と、かぼちゃの『いいいたて雪つ娘』の種を時き続けている。それは、洋裁から農業への華麗な転身だった。「わたしの人生後半、イモとカボチャ(笑)」。

「洋裁」から「いも会長」へ

総勢十八名のかーちゃんたちを束ねる、渡邊とみ子さん。出身は福島市松川町。良縁があり飯館村に移り住んでも、洋裁の道を生きてきた。ミリ単位の品質にこだわるコシノヒロコブランドを手がけ、一から十までプロセスを熟知し、納期を守り品質を維持するために寝ずの作業も厭わない、自他共に認める洋裁職人だった。

かーちゃんブランドをつくりたい！

昔、とみ子さんが、長野県小川村を訪ねた際、「〇〇伝承」と名前の書かれた商品をたくさん見かけたという。放っておけば高齢化で消えゆくであろう隠れた「技」のバトンを、敬意を込めてつないでいるのだ。「私たちも今までやってきたことを元に、同じようなことをしてい

るの」。かーちゃんたちの『味』をぎゅっと詰め込んだオール手作り。元が取れているかという「なかなか大変」だという。しかし、地域に根ざして生き抜いてきたかーちゃんは、『手を抜いた商品は売れない』ということを経験として知っているのだろう。決して手間ひまを惜しんだりしない。

しかし、その心を曇らせる現実もある。放射性物質検査だ。弁当を作るたび、1kgの検体を袋に詰めて提出しなければならぬのだ。費用をかけた挙げ句、変わり果てた形で戻ってくるから、ため息も涙も出る。到底、「仕方のないこと」と諦めのつくことではない。

プロジェクトでは、ウクライナ基準よりも厳しい1kgあたり20ベクレルという基準を設けている。「食品を提供する」ということは、加害者にもなりかねない」という思いからだ。「かーちゃんマークがついているのは本当に安心なんだから是非食べてみてほしいの」。





まぶたの裏には いつも飯館

避難してから幾日過ぎただろう。畑に弁当作り、イベントや取材にと目まぐるしく走り回るとみ子さんだが、飯館のことを忘れた日はただの一日もない。

食品加工の工場の庭に丸太をしつらえ花を植えていたというときみ子さん。仲間のかーちゃんたちがひよっこり見に来るようになった。すると、触れられたかーちゃんたちが、こそつて庭に花を植えるようになり、庭合戦が始まった。「お茶飲んでがっせ」と花をつまみにハーブティーを傾けながら、こうなつたああなつた、あんな花こんな花あつたよとお互いの庭を行き来していた。

震災が起こるまでは、そんな日々を送っていた。

飯館村のホームページにアップされている復興計画書。載っていた風景写真を見て「ほんとキレイで涙が出ちゃうの」と、とみ子さん。お盆に帰宅したが、完成間近だった新しい加工室の裏も線量が高いままだという。

震災後、とみ子さんはひとつの詩を書いた。

いまだで詩を書いたことはなかったが、あるときふと、生まれ出た。



あきらめないことにしたの



たくさん悔しい思いをしたよね

たくさん、たくさん泣いたよ

でも、生きてる

やつぱり止まっては駄目だよ

どんなに小さな一歩でも前へ進んだら

ほらね 実ってくれたんだもの

植物は、こんな状況の中でも

頑張つて生きているんだもの

だから私は

あきらめないことにしたの

これまでのいろんな悔しい経験や、人に言えないつらい出来事、そして泣いたこと。そのすべてがこの言葉に結集しているのだという。

結句の「あきらめないことにしたの」を書くまでにはすぐく時間がかったという。だけれども、この言葉に迷いはない。この詩がとみ子さんの新たな原点だ。

いつの世も、しょんぼりした世界の救世主はかーちゃん。こういうときはどの国でも女性のほうが元気らしい。「かーちゃんの頑張りで世界を明るくしなくちゃね!」。そう言つて、とみ子さんはまた大きく笑った。



『かーちゃんのカ・プロジェクト協議会』
〒960-1246
福島市松川町金沢字船場3-27
TEL 024-567-7273
E-mail ka-tyan.chikara@siren.ocn.ne.jp
http://www.ka-tyan.com/



発想から発送までお客様のニーズにお応えします。

タカラ印刷株式会社

〒960-8141 福島県福島市渡利字絵馬平86-9
TEL 024-526-4303 FAX 024-526-4302
E-mail takara@inaka.co.jp http://www.takara.inaka.co.jp/



RB-Q04008



適用範囲: 印刷・製本・社会調査